

「大正教養主義」の再検討

武藤 清吾（広島経済大学）

いわゆる「大正教養主義」の実態把握や概念規定は、近代文学研究の世界では不十分にしか行われてこなかった。

助川徳是は「大正期教養派と批評の動向」で、「教養思想そのものは、社会主義の側からの批判の前に、その観念性や現実認識の甘さを暴露していき、戦後は唐木順三によって、その創造性を持たぬ批判性、思想追究の無原則性、大衆蔑視の文化的貴族趣味性などが痛烈に指摘された」が、「文学に果たした一定の役割は認めておかなければならない」として、「個人を内的に捉えその権威を主張することを通じて、型にはまった規範を打ち破るリベラルな魂を開発し定着」させ、「多彩で向上的意欲にあふれた真摯な自己追究の雰囲気や豊かな人生観論的な趣味を文学にもたらした」とその意義を認める。しかし、「戦後、漱石門下生と『白樺』系が合流して『心』（昭23創刊）で、オールド・リベラリストとしての保守思想を形成した」ことで短絡的に「状況や内容の違う教養思想を評価する」のは問題であるとした。

唐木順三は、芥川龍之介の「死は大正期以来の教養の無力を事実において示した」として、「逆にキリストや釈迦を始め、一切の聖なるもののうちに俗なるものを見出すことにおいて、自己の存在の可能を自信づけようとさえした」と批判する。「教養はいまや古典から古典性を奪う道具として利用せられ、自己保存を広く弁解づける装飾」とする。さらに「加藤周一、中村真一郎、福永武彦のグループは、時間において歴史を、空間において世界を、焦点において現実をという意図で古典百貨店の中を歩み廻っている」とする。

筒井清忠「日本型「教養」の運命」は、「明治の修養主義から大正の教養主義へという類型的な変動図式」という唐木の考え方は「「修養」という言葉の実際の使われ方、社会意識として「修養」という観念が登場し広く広まった時期、これらを事実在即してミクロに検討してみた時」「ミス・リーディング」である、また「唐木は明治から大正にかけての言論活動を広い層にわたって点検する作業を行わなかったのではない」と批判する。

本発表では、こうした唐木の議論の生まれてきた背景についてこれまでの議論を整理する。そのうえで、1910～20年代に人気を博した菊池寛ら「通俗小説」の修養論と『文藝春秋』などに見る教養論、1925年前後に展開される教養論と文化論とを比較検討する。また、文学大衆化論とプロレタリア文学論に胚胎した教養論にまで言及したい(参考、前田愛『近代読者の成立』)。